



2015年2月16日発行 第557号

CONTENTS

第12回 アジア中古車流通研究会のご案内 2
 読後雑感：2015年 第4回 3
 上海街角インタビュー (67) 10
 【中国経済最新統計】 13



第12回 アジア中古車流通研究会のご案内

主催：京都大学東アジア経済研究センター

共催：現代中国地域研究京都大学拠点

後援：京都大学東アジア経済研究センター支援会

時間：2015年2月28日(土) 13時

場所：名城大学名駅サテライト(KDX 名古屋駅前ビル 13階)

<http://www.meijo-u.ac.jp/about/campus/msat.html>

司会

1、自己紹介 13:00-13:20

2、報告 13:20-17:00

□北島 義貴 (トヨタカローラ徳島 代表取締役社長)

タイのプーケットにおける販売店経営

□川崎 大輔 (プレミアムファイナンシャル 海外事業企画室マネージャー)

タイにおける中古車流通の現状

□上山 邦雄 (城西大学 教授)

新興国市場の多様性—中国とロシアを事例として

終了後 懇親会 (予定 旬鮮酒場天狗 堀内ビル地下1階 052-586-3660)

研究会の出欠はとりませんが、懇親会は予約の都合上、出欠を御連絡ください。

なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター協会の法人会員・個人会員のみが参加できるクローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地 shioji@econ.kyoto-u.ac.jp まで協力会への入会手続をお問い合わせください。

今後の日程

2015年5月23日(土) アジア中古車流通研究会 京都大学法経東館みずほホール

読後雑感：2015年 第4回

12. FEB. 15

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

1. 「カンボジアで出会いたい 100 人」
2. 「仏教先進国 ミャンマーのマインドフルネス」
3. 「国境と少数民族」
4. 「日本の宗教 本当は何がすごいのか」
5. 「サバイバル宗教論」

1. 「カンボジアで出会いたい 100 人」 西村清志郎著・発行 2014年11月1日

副題：「アジアの小国でのビジネス、文化、生活を知りたいときに出会いたい人々」

この本は、現在、カンボジアで活躍中の日本人、100を紹介したものである。登場人物は各界の老若男女であり、著者が副題に書いているように、カンボジアのビジネス、文化、生活を知る上で、格好の書となっている。おもしろい切り口のカンボジア紹介本であると思う。ちなみに私のカンボジアでの知人も、数名登場している。

本書で紹介されている人物の中では、地雷処理事業に命を賭けて携わっておられる高山良二氏が傑出している。同氏については、以前の読後雑感でも紹介させていただいたが、私もその活動には頭が下がる思いである。できるだけ早い機会に、同氏の活動拠点であるバタンバンを訪ねてみたいと思っている。その他、カンボジアで起業し成功した例として、胡椒の生産販売を手掛けるクラタペッパーの倉田浩伸氏、アンコール土産としてアンコールクッキーを創作し販売している小島幸子氏などが紹介されている。またポール・ポト裁判傍聴記など貴重な情報を発信し、ジャーナリストとして著名な木村文氏も紹介されている。

この本には 87 歳の老人から 21 歳の若者に至るまで、多くの人物が幅広く紹介されているが、登場人物を年齢、男女、職業で分類して調べたところ、おもしろいことがわかった。まず年齢別では、80代=2名、70代=2名、60代=8名、50代が16名、40代=21名、30代=30名、20代=17名、年齢不詳だが40代以下だと思われる女性4名、となっており、40歳以下が75%を占める。男女別では、男性=65名、女性=35名である。つまり本書に登場する

人物の大半は、カンボジアの暗黒時代＝ポル・ポト時代を知らないし、そのことを深く意識していない。したがって多くの紹介文が、若者たちの起業への意気込み、支援事業などへの熱情で埋め尽くされており、それらは「カンボジア夢物語」とも形容できるようなものとなっている。若者たちがカンボジアの復興に情熱を傾けるのは、たいへん良いことではあるが、カンボジアの暗黒の歴史の時代をよく勉強し、その後遺症がまだ色濃く残っていることを、十分に意識して活動を行ってもらいたいと思う。その意味で多くの若者たちに、ぜひ、高山氏のもとを訪ねてみてもらいたいと思う。

おそらく本書に登場している若者たちの中で、10年後もカンボジアで活躍している人物は1割ほどだろう。実社会は

すべての若者たちをハッピーエンドに導くほど甘くはない。そこには厳格に適者生存の原理が働くからである。それでもこれらの若者たちのチャレンジ精神を高く評価すべきだと、私は思う。著者の西村氏には、10年後、これらの若者たちを追跡調査し、「その後の100人」という書を著してもらいたいと思う。

なお、本書にはカンボジアの代表産業である縫製業やその他の労働集約型産業に携わる日本人が、まったく登場していないことに不満が残る。

2. 「仏教先進国 ミャンマーのマインドフルネス」 西澤卓美著 サンガ 2014年11月1日

副題:「日本人出家比丘が見た、ミャンマーの日常と信仰」 帯の言葉:「仏教を語らず、ミャンマーを語ることはできない」

この本は宗教関係者には、興味深い書だと思う。宗教関係者ではない私にとっても、とても面白かった。たしかにミャンマーは仏教徒が大半を占めており、「仏教を語らず、ミャンマーを語ることはできない」という言葉は当たっている。しかしながらミャンマーの仏教は上座部仏教であり、日本の大乘仏教とはかなり違うので、日本の仏教常識にとらわれているとミャンマーの理解もできかねることになる。この本は、そのミャンマー上座部仏教をわかりやすく、しかも面白く紹介しているので、ミャンマー理解を深めるための好著だと思う。

この本では、仏教僧の日常生活や出家式の様子などを詳しく描いている。その中に出家の前に行われる質問があり、そこに「ハンセン病がありますか?」、「腫れ物がありますか?」、「皮膚病がありますか?」、「てんかんがありますか?」、「人間ですか?」、「男性ですか?」、「自由の身ですか?」、「借金はありませんか?」、「王の家来ではありませんか?」、「父母の許可を得ていますか?」、「数え20歳になっていますか?」などというものがあり、私は驚いた。しかもその質問の理由が、「治療目的で出家し治ったら還俗する人がいたから」、「借

金を返したくないので出家した人がいたため」などというので、再び驚いた。

巻末には、ミャンマー高僧の数人を紹介した個所もあり、たいへん参考になる。しかも最近話題になっている仏教過激派のウィラトウ師についても、詳しく紹介している。今まで私は他書では、ウィラトウ師の経歴や主張を見聞することがなかったので、参考になった。ただし西澤氏は、この個所については現場に踏み入って調査しているわけではなく、ネット上での情報渉猟によっており、ぜひとも現場密着型の調査結果を早急に発表してもらいたいと思う。このことは、現在のミャンマー理解にとって、もっとも重要なことであり、またミャンマー語に堪能であり、上座部仏教僧でもあった西澤氏にしかできないことである。ぜひとも、お願いしたい。

ミャンマーでの出家生活を体験され、日本で布教を続けられた西澤氏は、やがて還俗という人生を歩まれることになる。西澤氏はその理由を、「出家するときに、“輪廻の苦しみから逃れるためにこの衣を受け取り、憐れみを垂れて出家させてください”と和尚に願って出家します。しかし今自分が求めているのは輪廻の苦しみから逃れることよりも、あらゆる固定観念から自由になり無我を体験して今幸せに、今自由になることだと思っています」と説明されている。私には、これがよくわからない。いずれかの機会に教えていただきたいと思っている。

西澤氏がミャンマーで出家生活を送っていた時期は、1990年代後半で、ちょうどそのとき私もミャンマーで悪戦苦闘していた。そのときの私の実体験から、「市内に象が闊歩していた」とか、「僧はバスよりもタクシーを使う方がよい」などという記述には、違和感を覚えた。

3. 「国境と少数民族」 落合雪野編著 めこん 2014年7月25日

本書の目的は、「ミャンマー、ラオス、ベトナムが中国と国境を接する東南アジア大陸部の国境域を対象に、東南アジアと中国のはざまに暮らす少数民族が、国家からの政治的、経済的、文化的影響を受けながらも、自らの生業や生活を能動的に変化させ、多様な生存戦略を構成していく、そのプロセスを明らかにする」ことにあるという。たしかに、この本からは、3か国の国境地帯に住む少数民族の歴史と最近の生活環境がよくわかる。ことに民族衣装や蚊帳という独特の視点からの調査研究は、おもしろい。

国境地帯の農業についての調査もおもしろく、ミャンマーのシャン州では、ニンニク栽培がブームとなっており、ニンニク御殿が林立しているほどだという。またラオス北部では、2004年以降、中国企業によってサトウキビの大

規模な契約栽培が行われるようになり、その後、乾季水田裏作物としてカボチャ、トウガラシ、インゲンマメ、スイカ、キャッサバ、とうもろこしなどに広がり、最近ではバナナ、コーヒーに及んでいるという。ただしラオスの少数民族生産者が契約した作物を出荷したにもかかわらず、中国企業が代金を支払わないなどのトラブルが続出したため、ラオスの郡農林事務所が契約の仲立ちをするようになってきているようだ。ベトナムでは、中国に飼料としてとうもろこし、キャッサバが輸出されていたが、最近では、カルダモン（ショウガ科の植物で、漢方薬や香辛料に使われる）の栽培が盛んであるという。

著者は、「いずれにしても、3か国と中国国境沿いに住む少数民族は、国境を自由にまたいで生活しており、彼らには国境という概念がないようであり、各国ともに自由な往来を黙認している状態である」としている。私はミャンマーと中国の国境沿いをなんども見たが、たしかに、国境が小川であったり、大きな木が目印であったりする程度だから、その地の住民たちは、そこをいとも簡単に往来していた。密輸という聞こえは悪いが、国境の小川を、小舟で物資を運搬している現場もみたことがある。

ミャンマーにはインドやバングラデシュとの国境沿いにも、少数民族が住んでいる。落合氏には、引き続き、その辺りの取材もお願いしたいものである。

4. 「日本の宗教 本当は何がすごいのか」 田中英道著 育鵬社

帯の言葉：「知っていますか？ 日本の神様・仏様のこと」

本書で田中氏は、神道は宗教であり、「生活の習俗でしかないように見える日本人の信仰のあり方を“宗教”としてとらえることが必要」であり、「日本の宗教がなぜ世界のいろいろな宗教と対立した関係にないのか。逆に包み込むように受容できるのか」と問いを發し、それは「日本の宗教が、特に神道というものが、他の国々の宗教の出発点のところをとらえている」からだと主張している。

また田中氏は、「一神教では、神が自然をつくったといえます。すべては神が創生するわけです。当然、自然の中に、神の論理を探す志向が生まれます。自然のつくり出すさまざまな状況を分析し、そこに神の論理を見出そうとするわけです」、「日本では、最初に天と地という自然があります。そこから神々や人間などが生まれたと考え、意志的な誰かが自然をつくったとは考えないので、その理由を探究する起因が生じません。自然が与えたものに対する、受動的な対応しかないからです」と、一神教と多神教のおもしろい比較を行っている。

さらに田中氏は、「聖徳太子は、日本の“神道—仏教”の戦いをいかに回避す

るかに知恵を絞った」と書き、「人の和を説いた」と述べている。また「日本では、神とは自然そのものであり、そこに存在する力、エネルギーの現れです。それに対して、仏は悟りを開き、智慧を身に付けて成る者、すなわち成仏する者です」と、神と仏を対比、統一している。

田中氏は、「短歌や俳句がなぜ短いのか」と問いを發し、「その短さといえは文字だけでなく、言葉に対する日本人の在り方、日本人の考え方を反映しているからです。短いということは、できる限り簡略にする。できる限り余計な説明をそぎ落とす。そして、肝心なことを言う。しかも即物的にいうのではなくて、感性を込めて述べる。さらに 57557 とリズムカルに詠うのです」、「和歌や俳句の短さは、長い話、くくだしい説明は必要ではない、論理に対する信頼がない—長い言葉で論理立てる話法が行われていなかったという証です。結局、事柄に対し、表現力不足というよりも、語らない事実を共有していたということだと思われます。共同体性が強いのです」と答えている。

田中氏は、日本人の議論下手を取り上げ、「日本人の議論下手を克服するには、かなり長い期間にわたって留学させることです。知的な青少年にそういう機会を与えなければ、日本の議論をリードするエリートをつくることはできません。ぜひ文部科学賞にはそのあたりを考えてほしいと思います」と提言している。私も若い頃から議論下手であり、そのことにコンプレックスも感じ続けてきたので、この田中氏の提言はわからないでもない。しかし最近、「百編の議論よりも、一回の実績」だと思ふようになった。いかに議論上手であったとしても、その人に実績がなければ、他人を動かすことはできない。逆に実績さえあれば、多少議論下手でも、他人を感銘させることはできる。私は議論下手で寡黙な日本人が、今こそ、実績を引っ提げて、世界に登場する時期だと思っている。

5. 「サバイバル宗教論」 佐藤優著 文春新書 2014年2月20日

帯の言葉：「仏教、キリスト教、イスラーム教 その凄まじき力の秘密は何か？」

著者の佐藤優氏は、同志社大学の神学部でキリスト教を学び、外務省に務めたという変わり種である。後に鈴木宗男氏問題に連座し、その職を辞した。本書の冒頭でも、佐藤氏はそのことを意識し、「前科一犯の佐藤優です。よろしくお願ひします」と書き出している。佐藤氏は外務省を出てから、作家兼評論家の道に進んだ。私も同志社大学経済学部卒なので、佐藤氏には親しみを感じており、それらの著作にはできるだけ目を通すようにしてきた。そしていつもその博学多識、新鮮な切り口には驚かされてきた。今回も、「サバイバル宗教

論」というタイトルに惹かれて、読んでみた。残念ながら本書では、帯の言葉の「仏教、キリスト教、イスラーム教 その凄まじき力の秘密は何か？」については、論理的に解明されていなかったが、参考になる個所があったので、以下に列記しておく。

- ・本来、一神教というのは寛容なんです。それは無関心にもとづく寛容です。神様と自分との関係において自分だけが救われればいいと考えているわけですから、他人が何を信じているかということには関心が向かないんです。
- ・仏教が多神教で寛容な宗教だというのは、スリランカの内戦はどう見たらいいのか。双方とも多神教のヒンドゥー教と仏教徒ではないですか。特定の宗教が寛容であるとか、特定の宗教が強権的であるというレッテルを貼ることは、実証的に見ればすぐに否定される意味のないことです。
- ・パキスタンは貧しい国です。その貧しい国がなぜ核開発を行うことができたのか。これは、サウジアラビアが全面的に支援したからです。サウジアラビアは、パキスタンが持っている核のオーナーなんです。
- ・日本人の宗教観は基本的に魔術的です。これは神道の影響だと思います。
- ・仏教とキリスト教は救済を求めることに熱心な宗教です。キリスト教のほうでは神の国、永遠の命という形で救済を考えます。
- ・日本の仏教は、葬式仏教という形でよく揶揄されますが、これは大きな間違いです。宗教において、葬式を司るということは、死というものをその宗教との関係において受け入れるということだからです。それは宗教としてもっとも強い影響力を持つということです。
- ・聖書はラテン語で書かれています。しかしラテン語を理解できない人たちにとっては何を言っているかわからない。説教をラテン語で語られても、ありがたいと思って聞いているけれども、これでは神のことはわかりません。ここでもともとラテン語も普通の人たちが使っていた言葉だったということで、フスは、世俗語、当時のチェコ語で説教を始め、聖書のチェコ語への翻訳を始めました。ウィクリフも同じことをやっています。聖書の全体を初めて英語に訳そうとしたのはウィクリフです。
- ・聖職者が独身制をとっている国というのは、例外なくその社会で宗教が実態として力を持っているところなんです。そういうところでは、独身制にしておかないと子供に権力を継承させることになり、財産や権力というものが特定の門閥に集まることになります。それを排除しないといけないから独身制にするわけです。聖職者というのは、権力を譲り渡すことができないようになっているのです。

・ノルウェーは豊かで短時間労働も実現していますが、なぜでしょうか。人口わずか 500 万人しかいませんが、イギリスとの間で北海油田の権利を半分持っているからです。要するに産油国なんです。そのオイルマネーで食べているのがノルウェーです。沖縄の人口は 140 万人しかいないから独立できないだろうという議論がありますが、140 万人以下で国連に加盟している独立国は 40 か国以上あります。尖閣問題は、日本にとってはたいへん深刻な沖縄の分離独立をもたらす可能性があるわけです。だから日本は、これまで尖閣問題をあいまいにして、尖閣のガス田の開発や石油の開発を本格的に行ってきませんでした。あえて距離を置いているんです。それはあそこから石油やガスがざくざく出てきたらどうなるかわかっているからです。

以上

上海街角インタビュー (67)

社団法人大阪能率協会アジア・中国事業支援室副室長 (海外委員)

順利包装集団董事 (在上海)

福喜多技術士事務所所長

福喜多俊夫

日本製品は好きですか？

一時減少していた中国からの観光客が増えつつあるようで、各地の観光地でも大阪の街中でも多くの中国人観光客に出会うようになった。中国人が日本で買うおみやげも一時の電気炊飯器、電気ポットからステンレスボトルや化粧品、大衆薬に変化しているようだ。

日中関係が険悪になって反日デモが起こり、日本製品排斥運動がネットを賑わしていた時も私のまわりの上海人は日本製品を愛用してくれていた。さて、最近の上海人はどのような日本製品に興味を示しているのだろうか？

1. 40歳代中頃の女性

私が愛用している日本製品は化粧品と薬です。日本製の化粧品は上海でも買えますが、薬は日本へ出張した時に買ってきます。スキンケア製品や歯磨きも日本製を使っています。チョコレートも日本製はおいしいです。Meiji のダークチョコレートは大好きです。

日本製品は品質管理がしっかりしているので安心です。中国では偽薬が氾濫していますが、日本では偽薬が流通することはまず不可能だと日本の友人が言っていました。

2. 40歳代前半の男性

私は日本に長く居たことがあるので、普通の中国人と趣味が違うと思います。日本へ出張すると、漫画を大量に買ってきます。中国で売っているコピー品ではなく、オリジナルを集めています。それから、海洋堂のフィギュア（お寺の仏像の3Dプリント版）を集めています。

3. 30歳代前半の女性

去年の5月に日本へ出張しました。その時買ったものは自分と子供用には各

種の薬、ステンレスボトルです。友達に頼まれたものは化粧品（ヘアダイを含む）、大衆薬（下痢止め、風邪薬、胃薬、目薬）、腕時計です。薬は日本製が一番信頼できます。中国で薬を買うのは偽薬をつかまされる可能性があるので危険です。私の周りの人も以前は日本製の電気釜やカメラを欲しがりましたが、最近では化粧品と薬が一番人気ようです。

4. 20歳代後半の女性

私は日本へ行ったら象印のステンレスボトル、サマンサタバサのかばん、マツモトキヨシで各種の化粧品と薬、それから日本のお菓子を買いたいです。私の同僚は日本へ旅行したとき友達に頼まれたものも含めてステンレスボトルと薬をたくさん買ってきました。

5. 20歳代前半の女性

1月末から4泊5日で祖母と一緒に大阪へ買い物に行きました。祖母は電気釜を買いました。以前日本の友達に買ってきてもらったものはとてもおいしく炊けました。今度は同じ象印の大きな電気釜を買いました。それと、檜のまな板、ご飯がくっつかないシャモジを買いました。私はドライヤー、カーラー、電動歯ブラシ、ステンレスボトル、化粧品、薬、そしてアウトレットショップでいっぱい洋服や雑貨を買いました。ヨドバシカメラでは Made in Japan のステンレスボトルは全部売り切れで、タイ製しか残ってなくて、心齋橋やデパートで Made in Japan を探して買いました。エルメスのバッグも中国で買うより日本の方が安かったです。楽しみにしていたのは道頓堀のカニ道楽と本物の神戸牛を食べることでした。勿論、目的達成です。

6. 40歳代後半の男性

日本製が優れているのは、食品、薬、化粧品、トイレットリー製品です。これらのものは安心して買えます。車はドイツ製が一番です。日本製も悪くないけれど重厚感が違います。電気製品は特に日本製を買わなくても中国製も品質がよくなっているけれど、エアコンは日本製が一番いいです。電気釜も日本製が一番いいです。日本製の電気釜で炊くとごはんがとてもおいしいです。

7. 30歳代中頃の女性

私は日本へ行ったとき、東急ハンズへ行きました。欲しいものがいっぱいあって感激しました。100円ショップも面白かったです。中国製が大半でしたが、

中国にはあんないいものは売っていません。

8. 40 歳代中頃の女性

私の子供は日本製の水彩色鉛筆が大好きです。絵画教室で友達にも人気があり、一緒に使うのですぐ減ってしまいます。主人の同僚の日本人に買ってきてもらっています。

9. 40 歳代中頃の女性

日本には子供用の知育玩具がたくさんあってうらやましいです。中国でも巧虎（ベネッセ中国）がいろいろ出しているけれど日本には追いつきません。子供がネットで日本の「おえかきグミランド」や「ハッピーキッチン デコレーションケーキ」を見つけて欲しがります。主人の日本の友人に送ってもらうように頼みました。

10. 30 歳代の女性

今、一番欲しいのは日本製粉ミルクと紙おむつ。ショッピングモールで見つけたら買い込みます。

中国人旅行者が買うものは持って帰れるものだから、大型の商品は話にならなかったが（一人だけ車に言及した）、日本のステンレスボトル、化粧品、薬は圧倒的に人気があった。私の 10 年以上の中国生活で中国人の友人に頼まれたものは、以前は電気釜、電子ポット、オムロンの血圧計（いずれもメイドインジャパンであることが必須条件）。最近はステンレスボトル（これも Made in Japan であることが必須）、化粧品（銘柄指定）、薬（銘柄指定）、キャラクター文具。一昨年は空気清浄器を 4 台頼まれた。最近はネットで日本製品をよく調べており、注文は銘柄指定が殆どだ。

以上

【中国経済最新統計】

	① 実質 GDP 増加率 (%)	② 工業付 加価値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都市固 定資産 投資増 加率 (%)	⑥ 貿易収 支 (億\$)	⑦ 輸出 増加率 (%)	⑧ 輸入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
6月	7.6	9.5	13.7	2.2	21.8	317	11.3	6.3	-16.3	-6.9	18.5	16.0
7月		9.2	13.1	1.8	20.6	251	1.0	5.7	-7.8	-8.6	18.9	16.0
8月		8.9	13.2	2.0	19.4	267	2.7	-2.7	-12.7	-1.4	18.4	16.1
9月	7.4	9.2	14.2	1.9	23.1	277	9.8	2.3	-6.4	-6.8	19.8	16.2
10月		9.6	14.5	1.7	22.4	320	11.5	2.2	1.8	-0.2	14.6	15.9
11月		10.1	14.9	2.0	20.0	196	2.8	-0.1	-8.7	-5.4	14.5	15.7
12月	7.9	10.3	15.2	2.5	18.8	316	14.0	6.0	-7.8	-4.5	14.4	15.0
2013年	7.7	9.7	11.4	2.6								14.1
1月				2.0	20.8	291	25.0	29.0	-12.4	-3.4	15.9	15.4
2月				3.2		153	21.7	-14.9	-35.6	6.3	15.2	15.1
3月	7.7	8.9	12.6	2.1	21.5	-9	10.0	14.2	-19.7	5.7	15.7	14.9
4月		9.3	12.8	2.4	19.8	182	14.6	16.6	13.9	0.4	16.1	14.9
5月		9.2	12.9	2.1	19.7	204	0.9	-0.1	-14.4	0.3	15.8	14.5
6月	7.5	8.9	13.3	2.7	19.9	271	-3.3	-0.9	-17.3	20.1	14.0	14.1
7月		9.7	13.2	2.7	20.2	178	5.1	10.8	1.2	24.1	14.5	14.3
8月		10.4	13.4	2.6	21.4	285	7.1	7.1	-11.7	0.6	14.7	14.1
9月	7.8	10.2	13.3	3.1	19.6	152	-0.4	7.4	-16.8	4.9	14.2	14.3
10月		10.3	13.3	3.2	19.2	311	5.6	7.5	-8.2	1.2	14.3	14.1
11月		10.0	13.7	3.0	17.6	338	12.7	5.4	-9.3	2.3	14.2	14.2
12月	7.7	9.7	13.6	2.5	17.2	256	4.3	8.6	-3.4	-42.6	13.6	14.1
2014年												
1月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
 2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1月と2月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、()内の数字は1月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
 3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の86%（2007年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。